二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 さかき傘
挿絵 ごまさとし

序　章　月下美人　006
第一章　臥雲神社の巫女　017
第二章　異変と海蛇　059
第三章　罠の真意　101
第四章　悲哀の姉妹　139
第五章　落花　180
終　章　覚醒　244

登場人物紹介

Characters

水輝（みずき）

臥雲神社に住む若い巫女でありながら、陰では妖術師を狩ることを生業としている陰陽術の使い手。

茜（あかね）

水輝の血の繋がらない妹。人懐こい幼女と、冷酷なくノ一の二面性を秘めた少女。

夜巳（やみ）

来鋳家の一人娘。長い黒髪に豊満な肉体を備えた美女。

来鋳（くるい） 藤衛門（とうえもん）

捺谷地方を治める地主。農民を搾取し私服を肥やしている。

果心居士（かしんこじ）

稀代の妖術師。

『第四章　悲哀の姉妹』より

「あはぁあ……、気持ちいいぃ……。お姉さまぁ……」

蕩けるような媚声をもらしながら茜は、先ほどまで敵対していた女狐の股座に顔をすり寄せる。

秘毛がいくらか濃く、ぱっくりと口を開けた妖花は、色素や形こそ慎ましやかに整っているが、中央の源泉からは滾々と淫蜜が溢れ続けていた。それに花弁が深く充血しており、ひどく肉感的で生々しい。

茜はその淫らさを愛しむように舌を伸ばすと女が腰を前後させるのに合わせて、冠を弾いた大きめの陰核から、こちらも妖しい別種の芳香を放つ不浄の蕾までを、一生懸命に舐め上げている。

夜巳は少女を弄びつつ、くいくいと水輝に向かって手招きした。しばらく呆然としていた姉はハッとしたように近づいていく。

「この娘、どうやら逸物との精神適合ができておらぬ。このままだと放出の感覚が掴めぬからどんな快楽にさらされても絶頂を迎えることができず、狂死するぞ」

「――な……ッ？」

性への知識の薄さから、言われたことはよく分からないが、最後の単語だけはしっかりと分かり、水輝は顔を真っ青にする。確かに女にのしかかられている茜に目を向けると、表情から悦びは見て取れるのだが、ときおり低くうめき声を上げていた。そのたびに張り

詰めていた肉幹は、ビクビクと苦しげに震えている。
「ど、どうすれば……。助けて、助けてよ！」
呪道においては敵なしの少女は、妹という弱点にはあまりにも脆かった。途端に眉根に皺を寄せて、悲しい捨て犬のような表情になってしまう。
「助けることは容易い。そこに、射精を教えてやればよいだけじゃ」
夢中で秘部にむしゃぶりついている茜の舌戯で昂ぶってきたのだろう、姫君は表情の婀娜めいた色を強めながら屹立を指差した。
「刺激を与え、子種が噴き出すまで昂ぶらせてやるがよい」
「そんな……」
性技。いわゆる房術に関しては、くの一の専売特許であるため陰陽道を教え込まれた水輝はまったくと言っていいほど知識がない。それに単なる寄生体とはいえ、茜の大事なところと同化しているものに淫らな施しをするなんて……。
「……わ、分かった。やるわ。だからコレを解いてよ……」
羞恥や背徳にまとわりついてくる感情を振り切るように、首を横に振って水輝は覚悟を決める。窮屈そうに背中で縛られた両腕の拘束を解くよう求めた。
だがそのときの身をよじらせる動きで、若々しく張り出した乳房が形を崩すのを見て、夜巳はさらに恥辱の提案を差し出す。にんまりと相好を崩しながら親指を唇に咥えると、

唾液をまぶしながら舌を這わせ始めたのである。
男が見たら誰でもドキリときてしまうだろう、妖しく色めいた仕草。しかしそれがなにを意味するのか分かり、途端に水輝は顔を真っ赤にした。
「フフ、勘のいいことじゃ。しかし赤くなっている暇などないぞ？」
「……く――ッ」
自分の躊躇いで妹を苦しませるわけにはいかない。そう思い水輝は、夜巳の望むままに妹の脚の間へと近づいていく。誰よりもよく知った仲だけに、はしたなく開脚した格好でさえ見るのは恥ずかしいのに……。淫女の股間に敷かれ興奮から屹立している陰茎が、眼前に訪れる形になった。
茜は腰を跳ねさせ苦しげに身悶えしている。付属物自体もパンパンに膨れ上がって、早くなんとかしないと破裂してしまいそうだ。
（なにも考えないで。茜のため、茜のため、茜のため……）
妹の性器を口であやすことへの抵抗は大きいながらも、目を閉じてなにも見ないよう口を近づけていく水輝。
「……～～～～ぁうんッ！」
だが敏感な秘芽が巨大化する形でできたそれは、やはり相当敏感になっているらしい。震える吐息がくすぐっただけで茜は、可愛く嬌声をあげた。

どうすればいいのかすら分からない水輝はその声に一瞬動きを止めたが、夜巳に告げられた『狂死』の言葉が耳の奥を反芻し、躊躇わず口を近づけていく。
やがて唇が、先端の少しだけ膨らんだ部分に触れた。
「ふぁ……あ――」
「つぅ……っ」
姉妹は揃って、どこか情感を帯びた戸惑いの吐息をもらす。
触れてみるとビクンビクンと一定の間隔で痙攣しているのが分かる。怖いとすら感じるほどの逞しさを感じ、まだ処女の水輝は脅えを覚えた。
唇の感触から、多めに余った皮の内側にひどく硬くて熱い芯のようなものが感じ取れる。本来排尿のための器官で、硬くなると生殖器として機能する。という知識はあるのだが、それを生まれて初めて実感していた。
「ふぁああ……。あああぁぁぁぁ……」
一方の茜は敏感な部位に柔らかく温かいものが触れたのを感じ、夜巳にお尻で踏み潰された口を半開きにして、か細く喜悦の声をあげる。
「フフフ。よいよい、妹も悦んでおるぞ。今度は舌を使って舐めしゃぶってやれ」
茜を失うのは彼女にとっても損害ということか。夜巳が指示を出してくる。
ぬるーっぬるーっと緩慢な動作で、縦向きに唾液の筋を残していくと、しょっぱくてい

がいがする粘液が舌にこびりつく。茜を救うという義務感があるためか、妹の性器の一部を舐めることには、恥ずかしさこそあるものの嫌悪感はほとんど感じなかった。
「あひぁぁあん……。いぃぃ、気持ちいいのぉぉ……」
夢見心地の茜は、舌足らずな声で甘えた喘ぎをもらしている。
口唇奉仕をしているうち水輝は、秘芽の変化した剛棒の、皮がだぶだぶして分厚い先っちょが少しだけ根元より横に太くなっていることに気づいた。そしてそのちょうど境目のところには、包皮の奥で段差になっている部分がある。その部分をコリコリと舌先で突いてやると、茜の声はひたすら陶酔に甘く染まるのが分かった。
そうしてその弱いらしい部分を中心に責めていると、夜巳の次なる指示が飛ぶ。
「そうそう、男はそこが弱いのじゃ。よく分かったのう。では先端から皮をめくっていって、その部分を舐めてやれ。これだけ高まっておれば簡単に射精することじゃろう」
そうすれば茜が狂死することはなくなる。そう思った水輝は、亀頭部の先端でわずかに皮がめくれている部分に唇を添えた。
「きゃはぁぁッ！」
だが男性器の亀頭部は、女性器の陰核と同じような作りになっているらしい。内側のツルツルした部分に触れると茜はたちまち叫びをあげる。
だがそれが痛み混じりの悲鳴だとは気づかず水輝は、迷うことなく窄めた唇を先端の尿

道口に密着させると、強く吸い始めた。加えて淫技に詳しいのだろう姫君の指示通り、こわごわと舌を伸ばすと、子犬のように控えめな動作で割れ目の内側を刺激しだす。

「はぁぅ――ッ！　うあッ、ひゃぁぁぁンンっ！」

男性への奉仕にしては過激すぎる。だが被虐の快感に目覚めた茜には、最も適した射精誘導術と言えた。

はしたない嬌声をあげながら、ガクンガクンと腰を上下させる妹に、水輝はなおも吸いついていく。雄の青臭さが鼻先に込み上げてきて、頭がくらくらした。

膨れ上がった男物の性器を口にする不快感や嫌悪感は薄れ、代わりにジンジンと肉芯が火照るような疼きが込み上げてきた。知らず知らずに舌が卑猥に蠢き、行為に没頭しそうな自分がいる。

（ここ……。だよね、ここがいいんだよね……？）

尿道をくすぐっていた舌先を、亀頭部を覆う包皮の内側へともぐり込ませていく。唾液の膜に覆われているものの舌腹はザラついているため、雁首の鋭敏な粘膜をやや痛いくらいに刺激した。逃げるように腰をよじらせる妹を見ても、本能的に心の底から嫌がっていないと見抜き構わず舌を差し込んでいく。完全に勃起しているにもかかわらず皮が剥けにくいのは、できたばかりの肉茎の先端が刺激にひどく弱いことを代弁していた。

「きゃあ……っ、ふ……。ふぁひ……っ、ひゃひぃぃぃんっ」

やや唾液が少なく、ザラザラした舌が亀頭の上を這う。まだ皮も剥けていない男根にはあまりに強烈すぎる仕打ちだった。

一際大きく茜の腰が跳ねたかと思うと、水輝は唇の中に、なんだかしょっぱいような液体がこびりついたのを感じた。それが射精の予兆である先走り液であるとは知らないが、少なくとも、男性器から出ただろう液体でもさしたる嫌悪感を催さない。むしろその生臭さが鼻を突くと、ずきっと子宮に震えが走るような気がした。

「ひぃぃっん。お姉さまっ、お姉さまぁっ」

先ほど覚えた絶頂感の再来に、茜が叫んだのは、水輝でなく夜巳だった。

キュッと胸に切ない痺れを感じる水輝は、同時に茜が腰を天井へ向かって突き出したため、口の中いっぱいに膨張した亀頭部を咥え込まされることとなる。

その拍子に包皮が雁首の下までめくれてしまい、敏感すぎる亀頭部全体がぬめつく姉の口腔にすれる。

とろつく唾液に覆われた柔らかい口腔粘膜が亀頭部全体をくすぐり、同時に敏感すぎる雁首を限界まで開かれた朱唇に擦られ、剛根がこれまでにないほど激しく肥大化した。

「あぁぁぁっ！　お姉さまぁっ、きますっ！　くるっ、くるぅぅ――ッッ！」

床につけたおかっぱの髪を振り乱す茜は、一際甲高い悲鳴をあげる。

その途端、唇に覆われた巨大な肉の幹全体に、灼熱の鼓動がドクンッと鋭く駆け抜けた。

――ビュくる……ッ！
「くぶ……ッッ！」
液体とは感じられないほど濃厚で勢いをつけた迸りが喉を突き、水輝は思わず首を反らせて、唇から赤銅色の肉幹を引き抜く。
――ブシュルルッ！　びゅくくっ、びゅ……ッ。ビュルルッ！
「かは……っ、けっ、けほっ……ッ、けほっけほっ……。ふく……。う、うぁ……」
ぬるぬるして強烈な臭気を放つ液体が喉奥に触れたため、目に涙を浮かべる姉の顔に、まったく勢いを衰えさせない第二波、第三波の真っ白な精弾が叩きつけられた。
それらは頬といわず髪といわず、猫目の美少女の顔すべてを汚していく。

「フフフ、なかなかよい見世物であった」
射精の快楽に打ちひしがれ、法悦の境地をさまよう茜の顔から、夜巳は腰を上げた。
顔中にこびりついた夥しい量の液体を巫服の肩口で拭いながら、水輝は茜の足元に座り込んだまま楽しげに笑う姫君を見上げる。
「これで……、茜は大丈夫なのね？」
口の中がイガイガして気持ち悪い……。白濁の絡んだ唾液も衣服にこびりつけながら、たったひとつの心配事を問う水輝。

「難儀であったが案ずることはない。この娘の精神はわらわの式神と上手く融合することができた。これで男としても女としても至高の快楽が得られよう。もう狂死の心配はない」
　水輝としては最悪の事態を逃れたもののすべてが悪いほうへ転がっていることに変わりはない。しかし夜巳にすれば、もう一人のお気に入りである茜が発狂もせず、事態が次々と望む方向へ向かっているのである。
「さて次は……。お前にもわらわの式とかよってもらうことにしようか」
「――⁉」
「なに、怖がることはない。お前にまで下賤なものを生やそうとは思わぬ。じゃが昨夜壊されたわらわの式は、責任を持って直してもらうぞ」
　昨夜壊した式――。といえばひとつしかなかった。……だが考えを巡らせるより早く水輝は、下腹部を締めつけるズキリと重い痛みに襲われることとなる。
　先ほど直腸へと忍び込んだ鮭肉色の液体。あれが内部で暴れているようだった……。
「……ッッ！　ま、まさかさっきの――、あれ……は……」
「その通り。昨夜お前が無礼を働いた、わらわの父上じゃ。あのような貧相な身体にしたのはお前なのだから、修復するためにお前の力を吸わせてもらうぞ」
　腹の中に、あの不潔な中年の顔を持つ、肉液状の式神が入っている。
　あまりにおぞましい事態に、顔を真っ青にして身体を折り曲げようとする水輝に、夜巳

はなおも絶望を与えた。
「辛くはないから安心するがよい。いまのままではこちらとしても、封印されているお前の力を吸うことができぬ」
そう言うと夜巳は、寝転がったままの茜に右手を向け、人差し指を伸ばした。そして次に、それを水輝のほうへ向ける。まるで指で方向でも示すかのように。
次の瞬間、茜の全身に付着していた『五通神法』の文字が、浮かび上がり水輝のほうへと飛びかかってきた。それは凄まじい勢いだったため逃げることもできず、少女のキリキリと痛む腹部へと吸い込まれるように消えていく。
「な……、なに……を……」
恥骨の近くに鋭い刃物をあてられたような、冷たい痛みだった。両腕が背中で拘束されているため、腹部を折り曲げることもままならない水輝は、苦しげな声で言う。加えて文字が入ってきた途端に直腸を襲う熱はさらに膨れ上がった。
いや膨張したのは感覚だけではない。内側に忍び込んだ鮭肉色の液体が、物理的に巨大化しているのである。それはたちまち細い腹部を裂かんばかりになった。便意にも似た感覚が重たく腹部を締めつける。
「お前の呪力中枢に五通神を書き入れたのじゃ。これで封じられたお前の力をいただくことができる」

「うく……っ、ぁ……ッ」

力を吸われる。それがどれほど重大なことかは分かっているのだが、いまの水輝には、おそらく力の吸収と連動しているのだろう式が、体積を増し始めたことのほうが問題だった。たちまちその場で横向きに倒れ伏すと、ぜぇぜぇと荒く息をつきながら、なんとかお腹に走る痛みをこらえようとする。

腿を胸のほうへ引き寄せて身体を丸めても、逆に弓なりに仰け反らせても、どちらにしろ特有の痛みや不快感があった。じんわりと燻されているような、緩慢ながら重く冷たい苦しみで下腹部が締めつけられる。

式神が膨張するごとに、痛みははっきりした排便の欲求になっていった。体内にあるのだから、欲求に従い出してしまえば力を吸われることはない。冷静に考えればそうなのだが、処女の精神は人前で排泄して耐えられるほど太くはなかった。

「フフフ、苦しいのはあと少しだ。感謝するがよい。父上が力を吸うごとに五通神が、お前の身体に、いままで味わったこともないほどの愉悦を与えてくれるぞ。それに……、わらわの可愛い下僕が一人、痛みを忘れるよう協力するそうじゃ」

全身に冷たい汗が噴き出してきて、聞いている余裕などなく身悶えし続ける水輝だが、視界の端で倒れていた茜がむっくりと上体を持ち上げるのに気づいた。

「うぁ……っ、あっ、茜……ッ」

腹痛にもがくいまの自分を見られることが、ひどく恥ずかしいものに思えた。対する茜のほうは事態が掴めないらしく、しばし呆然となる。だが目の前で自分に誰より近しい美少女が身悶えしていることは理解できたらしく、ぽーっと目を潤ませていった。

夜巳が耳元に唇を寄せ、小声でぼそぼそと囁きかけると、その表情には普段の無邪気さからは想像もつかないほど淫猥な色が刻まれる。最後に何事か命じられると、犬のように四つん這いで、まったく躊躇なく姉のもとへと近寄ってきた。間近で水輝の腹痛に喘ぐ様を見ると、舌なめずりして愛らしい桜色の唇を湿らせる。

「お姉ちゃん……。可愛い……」

いつもなら幼さしか感じられない舌足らずな声が、情欲に歪み、ひどくいやらしい音色へと変化していた。ドキッと胸を高鳴らせる水輝はそこで初めて妹に対し危険なものを感じたが、すでに遅く、少女の手は突如として袴に覆われた膝をすくい上げてきた。

「ひぁ……ッ」

あまりに突然の衝撃だったため、腸内で暴れる異物がもれ出してしまいそうで、水輝は下腹部に強く力をこめた。菊の窄まりがキツく締まってなんとか事なきを得るが、その間に茜は捕まえた脚を持ち上げ、自分が望むままの格好を取らせてくる。

肩と後頭部だけが床につき、腹部を折り曲げて腰が最も天井に近い位置にくる……。つい先ほどまで茜自身が取らされていた、まんぐり返しの体位だった。

腹部が折り曲げられることによって圧迫され、激しい感覚に腸壁が抉られる。身体に降りかかる衝撃のひとつひとつで尻穴からおぞましい式神が押し出されるようだった。

「やっ、やめ……、ダメよ茜……。あか……、……――くぁぁ……ッ！」

腰のあたりから脳天まで走り抜けた、強烈すぎる電流のような感覚に、水輝は一瞬わけも分からず悲鳴をあげる。

「うふふ……、ここだね。ここが気持ちいいんだね、お姉ちゃん」

袴の上から置かれた茜の手が、指先を尻肉の谷間にもぐり込ませ、中心にある蕾に触れてきたのだった。式神が中で暴れているため必死で締めている肛門は先ほどよりさらに敏感になっており、それだけできゅっと食い締めてしまう。まして妹は尻たぶの柔らかさを味わうかのごとく、優しい調子で揉み込んでまできた。感触は緩やかな波のように子宮へと伝わり、身体中の細胞をジンジンと火照らせる。

相手が夜巳であれば、屈辱や憎しみで胸を満たせたかもしれない。だが茜が相手ではなによりもまず恥ずかしさが際立ち、ゆるゆると肛門を揉まれていると、卑猥な感情に胸が締めつけられた。式神に鈍く締めつけられる直腸に、第一間接まで埋め込まれた指が細かく振動を送ってくると、焼けつくような苦しみとともに妖しい痛みが腹部を突く。

（やは……。な、なにこれ……）

その切なさが、少女にとって最も忌むべき部分にとうとう火をつける。

呪力を発生させる根源である、呪力中枢と呼ばれる部分を犯す『五通神法』が、淫熱を放ち始めたのである。強制的に牝肉に刻まれていく官能に、水輝は激しく狼狽した。
全身が焼けてしまいそうなほど熱い。それに尻穴を撫でられ、奥の腸壁をいたぶられる感覚が、ひどく心地よいものに思えた。やがて茜が指先を秘孔から離すと、チクリと胸が痛むような切なさまで感じてしまう。
瞳に濁った光を灯らせた茜が、姉の太腿を押さえ股間に顔をつけてきた。安物ながらそこそこは頑丈な袴を、犬歯で苦労しながらも繊維を少しずつ削ぎ取っていく。やがて小さな穴ができると、あとは引っ張るだけで縦に裂けていった。朱の布地の内側に可愛らしいお尻が露となる。
「うわぁ……。お姉ちゃんのお尻の穴って初めて見たぁ……」
わずかに腸液で濡れた濃紅の蕾に、茜の好奇の視線が突き刺さる。
妹にこんな姿を見られるなんて……。そう思うと水輝は自分の全人格がばらばらに砕け失せてしまうような気がした。だが楽しげに傍観する姫君の狂気と淫らさが乗り移ったように媚笑を浮かべた茜は、さらに無残な仕打ちを課してくる。
「あは……。可愛い、お姉ちゃんのココ。気持ちよさそぉ……」
うっすらと色素の沈着した会陰部に息を吹きかけ、濃い紅色の蕾が震えながら窄まる様を見て蕩けるように目尻を染める茜。刺激を誘い込むように開閉を繰り返す菊華を見てさ

らに興奮したらしく、亀頭部が一層膨れ上がり雁首のえらが深くなる。
姉の突き上げられた腰に肥大化したそれを密着させると、なんの躊躇もなく灼熱の滾りを着衣の内側に押しつける。最初水輝はなにをされているか分からなかったが、尻肉にあてられるツルツルした感触に、その正体を直感した。
「だっ、ダメッ！　茜、それだけは――」
背中で縛られた腕をギチギチと動かして、なんとか茜をはねのけようとする水輝。だが愛しい姉と一体化することになんの躊躇いもない妹は、先端で熱い蕾を探りあてると、一気に抉じ開けてきた。本来異物を排出するためだけにあるうえ、いまは式神を押さえつけるために絞られている部分だが、巨大な肉塊は強引に入ろうとしてくる。
（こわれちゃ……う……ッ）
侵入口を破られる痛みに悶える少女だが、長大な逸物は絹のようにツルツルとなめらかな粘膜を、強引に抉ってくる。菊の花のような皺が限界まで伸びきり、いまにも裂けそうだった。
腸液がわずかに染み出して、お尻の谷間に生温かさを感じた。腸は式神にいたぶられているうえ、入り口が抉じ開けられたために、身体が勝手に反応を起こし、腸の蠕動が始まったのだ。ぐるるっと下腹部が冷たい音を立てる。
「きゃぅぅぁっ！　かふ……っ。うぅぅぅっ。いやっ、いやダメぇぇっ」

括約筋にめいっぱい力をこめる水輝だが、すでにもぐり込む穴を捉えた茜を押しとどめることはできなかった。
めりっめりっめりっと段階を踏んで、巨大な亀頭部がとうとう送り込まれてくる。
その瞬間、子宮に震えが走ったように思えた。無理に割り裂かれた括約筋がきしむほど痛いが、それとは違う感覚が、腸壁に熱く込み上げだしたのだ。
異物に拡張された排泄器官が、召喚された悪鬼、五通神の力によって、おぞましい淫悦を覚える。
茜が結合を強めようとするごとに、太いそれに割り開かれた肛門には激痛が走り、無理やり抉られる腸壁は妖しい官能を覚える。そしてくの字に曲げられた腹部が強く圧迫されたことで、排泄への欲求も一段と高まってくる。
「うあぁ……っ、――あっ！　あぁぁぁぁぁ……」
全身を襲う三つの感覚に翻弄され、水輝は弱々しい悲鳴をあげた。
「す、すご……ぉ……。お姉ちゃんのお尻ぃ……、あったかくて、ぬるぬるして……」
先ほどは口腔粘膜に触れただけで達してしまった敏感な亀頭部を、ぬかるんだ肉穴に包まれて、茜は感極まったように愛する姉に抱きついた。
いつも寝るときやお風呂でしているように、蕩けそうなほど柔らかな乳房に頬ずりする。
腸内で彼女の呪力を吸い集めていく式神はいよいよ興に入って、呪力を吸い取りながら

巫女であり術師でもある、本来ならば自分らを使役する女の肉を作り変えていく。
腸粘膜が蔦のように絡みつき怒張をしごき上げる甘い歓待を受け、茜は鼻にかかった可愛らしい悲鳴をあげた。入り口部は食いちぎろうとするかのように締めつけてきて痛いくらいなのに、内側は濃厚な蜜液で絞られているように柔らかく、しかもムチムチと襞がせめぎあうように擦りついてくる。
「ひぃぃぃんっ。気持ちいいっ、お尻のあな気持ちいいよぉっ」
「うあぁぁぁ……っ。まって……、茜……、あかね……」
純白の巫女服に包まれた、天女のようにしなやかな身体を、荒々しく前後に揺さぶる。野獣のような妹の動きに、とうとう水輝までも上ずった声をあげてしまった。鮭肉色の液体型式と五通神。二つ淫鬼に蝕まれた心と身体は、すでに官能への抵抗をなくしている。
快楽の秘孔に剛棒がぬちゃぬちゃと出し入れされ、色白の美貌が艶めかしく紅色に上気した。
（だ……っ、だめ。お尻が……、お尻がぁぁぁ……っ）
断続的に鼻にかかった吐息をこぼしながら、水輝は不思議な感覚に陶然としてしまう。
麻痺した下腹部に力が入らず、菊門には腸の内容物を押さえる力はすでにほとんど残っていなかった。だが直腸の蠕動に乗って外に出るかと思われた式神は、今度は茜の逸物に出口を塞がれ、飛び出すことができない。

式は出口を求めて四方へと暴れ出し、腸壁がさらに際どく痛んだ。それがもたらす熱い恍惚感に水輝はくらくらしてしまい、括約筋をさらにキュッと締めつける。
「あん……、ああンンっ、お姉ちゃんのお尻すごいぃっ。お尻気持ちいいのぉっ」
式神の動きは茜の陰根をも熱く擦り上げてきて、少女はいつもはのんびりした幼い声音で淫ら極まる嬌声をあげた。獣のように荒々しく唇を求め、こちらの唾液を飲み干さんばかりに舌を差しこみ、強く吸いついてくる。
妹の女性器部は、興奮の度合いを示すようにドロドロと卑猥な汁を垂れ流しにしていた。それはオサネの位置についた剛直を伝って交合部にたまり、出し入れの滑りを手伝う。
グリリッと強く突き入れられると、姉は凛々しい眉根を弱々しく下げながら、小鼻を喘がせた。いつしか朱色袴が貼りついた腿の付け根には、水輝自身の蜜液がべったりと染み出してきている。
「あ、茜ぇ……。お尻が……、お尻がヘンになっちゃうぅぅ……っ」
桜色の唇から妖しい啜り泣きを放ち、とうとう水輝も、妹と結合した肉を擦り合わせるよう肌をうねらせだした。
腸から放たれる排泄の欲求は、限界まできている。腸壁はうねうねと激しく蠢き、栓になっている茜のものが抜けたらすぐに中身が噴き出すだろう。だがいきんでいるにもかかわらず解放されない、そのもどかしい感覚が、被虐的な恍惚へと変わってきていた。頭の

中で稲妻が閃いたかのように白くなる。腸壁に加わる圧迫感は子宮へと伝わり、応じるように膣肉からは滾々と花蜜が湧き出した。
「わは……っ、お姉ちゃん。お姉ちゃんも気持ちいいんだね。分かるよ。キュンキュンしてぐにぐにして……、わたしのを痛いくらい締めつけてくれるもん」
嬉しそうに、深々とつながった逸物をさらに激しく突き立てる茜。
「うっ……あう……。い、いい。すごくいいっ」
腹部全体が燻られるような苦しみも、異状な興奮と陶酔へと形を変えていた。尻穴から込み上げる感覚が、まだ処女の水輝に性感を刻み込んでいく。
そして、はっはっと犬のように荒く息をつきながら幾度となく唇を合わせるうち、茜に限界のときが訪れた。
夢中で揺すりたてていた腰の動きが一段と激しさを増し、特に敏感な雁首と締めつけてくる括約筋とが、ぴったりと合わさった状態で擦れたのである。内側のプニプニと柔らかな粘膜が、敏感な亀頭部全体をあますところなく搾り上げてきて、男性器からの鋭い快感に襲われた少女は、思わず姉から身を離し、全身を仰け反らせた。
その拍子に硬いそれは、生ぬるく蠕動する腸管から抜け出る。
「はぁぅ……っ、あ……、あぁぁぁぁぁ〜〜〜〜〜〜ッッッ！」
びゅるるるるっ！　びゅくくっ！　びゅくッ！　びゅッ！

『第五章　落花』より

（ど、どうして……。うそ……、うそ……っっ！）

痛みとはまるで違う疼きの嵐に、水輝は思わず、口腔を犯す老人の腰にすがりついた。膝が折れ、その場に倒れ込みそうになるが、男たちに支えられているため交合が緩むことはない。

「ンぁ……っ。んふ……、ふぅぅんっ」

単純に興奮を煽られる直腸結合と違い、膣粘膜を擦られていると、全身がばらばらになりそうな快楽が湧き起こってくるのだ。

処女を喪失してからさほど時間も経っていないのに、水輝ははっきりそれと分かるほど妖しいよがり声を放ち始めた。子宮への圧迫感や秘唇のヒリつきは、ジンジンした熱の塊に変わり、肉芯を淫らに火照らせる。

着衣を破れるほどぞんざいにはだけられ、露になった乳房がぐにぐにと弄ばれる。全身のいたるところが無骨な手のひらで撫で回され、敏感な尻肉にも何本かの指が回されていた。一度増殖を始めた淫熱はあっという間に全身を焦がす。いつしか少女は、唇を割って出し入れされる肉幹に、甘く屈服の吐息をもらしながら吸いついていた。

全身を満たす情欲が待ちわびていた瞬間が訪れる。

蜜壺が容量を超える異物でギチギチに割り開かれているのには変わりなかった。しかし冠を弾いて鋭敏な姿を現した秘芽や尿道口をくすぐられていると、濃密な火照りが陰部全

体を包む。剛棒で粘膜を抉る感覚だけが、その疼きを癒してくれた。
（あぁ……。深い……。そ、それに熱くて……。も、もっと激しく擦って……ぇ……）
膣肉は入り口付近に比べて奥にいくほど神経が薄いつくりになっているが、ほとんど触れられたことのない粘膜を雁首にかき回されていると、水輝は本能的な牝の愉悦にどうしても悶えてしまう。
「あんぁ……。んっ……、んふぅ……」
鼻先から甘美な吐息を奏で、周りを取り巻く男たちを艶めいた視線で見つめる水輝。
（お腹が……。お腹の奥が熱いの……。それに、あぁぁグリグリしないでぇ）
キュンキュンと激しく唇で性器を締めつけながら少女は、いつしか白い喉を突き出し、背を仰け反らせて身悶えしていた。ぷるぷると乳肉を淫らに揺らし、先ほど尻穴を犯されたときと同じように、ぐぅーっと男のほうへ腰を送る。
目蓋の奥が白く明滅して、先ほどから中途半端に投げ出されている感覚が込み上げてくる。茜に擦られて排泄とともに迎えたものとは違い、自我を覆い尽くすほど深くて大きな愉悦の塊が、全身の隅々まで駆け抜けた。
「んふ……っ。んむっ、ンンンンンン〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッッッ!!」
「くううっ。お、俺ももうだめだっ」
結合が最高まで達したときに、ひだひだが細かく触れるだけで快美な摩擦を生む、名器

と呼んでさしつかえない水輝の膣粘膜とまぐわっていた男が限界を迎えた。口元を歪めながら、膨れ上がった逸物をまだ破瓜の血を残した部分へとこれ以上ないほど突き込む。
わずかに震えたかと思うと、先ほどの老人とは比較にならない量の白濁液が、少女の膣内を汚した。細かい襞肉の隅々や、子宮内のいたるところに、熱い塊が染み込んでいく。
ドクドク……ッ、ビクッ……、ドクンッ……。
「んくぅぅ……っ。うっ、うむ……。ぁうぅぅぅんっ」
誰のものとも知れない子種の雨を、再び膣口いっぱいに受け、水輝はえも言われぬ興奮に身を委ねていた。
今度こそ子供ができるかもしれない。先ほどの貧弱な射精と違い、いまは量も深さもはっきりと感じられるほど、子宮を満たすほどだと感じる。
（それでもいい……。気持ちいいもの……）
知らず知らず口腔を締めつけ、蹂躙する男のものに、淡い朱色の舌先を絡みつかせていった。熱い昂ぶりを感じていると、牝の器官が甘美に疼く。艶めいた歓待を受け、老人が歳のわりにはかなりの量の射精を開始した。
吐き出す程度のことはできたが……。水輝は知らず知らずのうちに、コクッコクッと喉を鳴らし飲み干していく……。

前と後ろから支えていた男たちが射精を済ませたため離れると、少女はぐったりとしてその場に倒れ伏した。処女喪失から合わせて三人の暴漢に狂わされた腰には力が入らず、横座りになったままもう立ち上がることもできない。口腔も犯された反動からか、涎に濡れた唇を半開きにしたままで、ふぅふぅと熱情の混じった吐息をこぼしていた。

巫女の着衣は裾が長く、座り込んだ姿勢だと腿の半ばまでを隠している。しかし袴や帯はもちろん、たすきに用いた飾り紐や前掛け、髪留めまでも奪われたいまでは、純白の薄布は肌を隠すというより、被虐美を増すための装飾にすぎなかった。左手を覆う無粋な篭手だけが、若き戦巫女の凛々しさをとどめている。

「へっ、さっきまで処女だったくせにもう色気だしてやがるぜ」

「このままいけばあの化け物が大人しくなるのもすぐだ。おらっ、休ませんぞ！」

「く……ぅ……」

どうしようもない官能の波に流され意識を朦朧とさせている少女は、周りから聞こえる嘲笑に耳を塞ぐこともできなかった。汗で黒髪の貼りついた頬を紅に染め、ふるふると首を横に振るばかりだ。

それを見て邪心に口元を歪めたのは、擂斗の里の村長である。一度射精を終えたことで冷静になり、この村娘たちを苦しめる悪女への陰湿な嫌がらせを思いついたらしい。卑猥な笑みを浮かべながら、股間で猛る逸物をまさぐり陵辱の順番を待つ男たちに手当たり次

第声をかけていった。老人の案を聞かされた者には、例外なくいやらしい笑みが伝染していく。
「やれやれ、淫乱女が。俺らはお前の楽しみに付き合ってやってるんじゃないぜ？」
嘲弄を続けながら、眉間に皺の浮いた、髪の一本もない海坊主のような中年が、少女の投げ出された細い足首を掴んだ。悲鳴をあげる間もなくものすごい力で引っ張られ、巫服をかぶせた華奢な裸身はその場で半回転して、仰向けに寝かされる。男はそのまま身体の位置をずらして、横たわった少女の腹部にのしかかった。
（ち、ちがう……。わたしは淫乱なんかじゃ……）
心の中で自分に言い聞かせようとする水輝だが、処女を奪われたばかりで喜悦に流されたのは、自身が誰よりよく分かっている。
「へっ、変態は処女でもいい乳してやがるな」
いかにも下品な笑い声を室内に響かせつつ、海坊主が胸丘を掴んだ。ビクッと身体を緊張させて、巫女は視線を下に向ける。
桃色の先端部を親指で弄くりつつ、男は粘液まみれの肉幹に可憐な乳房を押しつけ、ぐにぐにと擦りつけだした。柔らかさの中に、どこか少女らしく芯の固さが残る絶妙な感触である。乳肉を揉みつつ乳首に振動を与えると、ンッンッとこらえた吐息が聞こえた。
（ど……、どうしよう……。ヘンだよ……、ヘンになっちゃう）

対する水輝は、これまでと違うじれったい感覚に、このうえなく追い詰められていた。悩ましい切れ長の瞳にはねっとりと膜がかかり、乳首を強く摘まれるたび眉根をひそめるが、それが緩むと甘い潤みを帯びる。

敏感な乳房からもたらされる快感は、粘膜を擦られた直後では逆にもどかしい。いつしか熱く艶めいた視線は、乳肉の中央で暴れる逞しい雄器からそらせなくなっていた。

「お、おい。そろそろ俺たちも……」

「そうじゃな。ククク、だが下は使ってやるでないぞ。たっぷり焦らしてやれ」

村娘にはない神秘性、高貴さ、そして美しさを持つ巫服の少女が、快楽に追い込まれていく様に魅了され男たちは、ぼろの着衣から剛直を取り出すと、少女の顔へと突きつける。

「ひ……っ。いっ、いや！　こないで……っ」

男たちが近づいてくるのを見て悲鳴をあげる少女だが、語尾が消え入るように小さくなっていったのは、赤黒い雄肉が周りを取り囲むのを見たからだった。ゾワゾワッと鳥肌が立つような感覚に襲われる。しかしそれが嫌悪でないことは、太腿の奥からぬるりと新たな熱蜜が秘苑を濡らしたことから分かった。

膣肉がキュンキュンと痛いほどの切なさを訴え、開閉を繰り返す。つい先ほどまで処女だった未熟な性感が、男性を求めているのは一目瞭然だった。それを隠す苦肉の策として水輝は、太腿を閉じることしかできない。

「おらおら、どうしたよ。これが欲しいんだろ？　色っぽい顔しやがって」
男たちのうち二人が、膝をついて勃起を左右の手に押しつけてきた。
（ああ……。あ、あつい……。こんなに熱いなんて……）
人体の一部とは思えないほど熱く硬く猛っている逸物が指先に感じられる。
無意識のうちに白魚のような指が、醜悪な滾りに絡みついていった。こんなに逞しく、熱くてゴツゴツしたものが、自分の身体の中に入ったことに改めて驚かされる。それを思うと子宮が一層切なく火照って、ドキドキと胸が高鳴った。
少女の淫らな反応を受け、柔らかくぷにぷにした手のひらでしごかれる男は、夢見心地にため息をつく。だが左手を使う男の息はもっと切迫していた。しなやかな指に雁首や鈴口を触れられつつ、なめし革の無粋な篭手にも竿部を擦られるのだ。これまで我慢していただけ強烈な快感にかられ、あやうく射精してしまいそうになる。
他の男たちも、もう我慢できないとばかり少女の身体を使って性欲を満たしだした。絹のような触り心地の黒髪を巻きつけしごきだす者。足の指の間を使う者。愛らしい頬に亀頭を押しつける者。とびきりの美少女が相手なだけに、蕩けた表情を見ているだけでも男としての欲求は存分に満たされる。
（やだ……。こ、こんなに沢山……。それに……）
ビクンビクンと射精に向かって起きる律動が感じられるたび、水輝の中では女の部分が

騒いで仕方なかった。男たちの興奮や快感が伝わってくるようで、つい両手にあてがわれた昂ぶりを愛しげに揉みしごいてしまう。股の奥で刺激を渇望する淫花と菊座が収縮した。

「く……。あぁぁぁ〜〜っっ……。も、もうだめっ、もうだめぇ……っ」

擂斗の老人が提案したらしい。少女のその部分には誰も触れようとしない。あまりのもどかしさに、畳に後頭部をつけ背を反らせて、苦しげに嗚咽をもらす水輝。その動作は焦燥や嫌悪というより、胸肉を男の欲望に押しつけているようにも見えた。

閉じようとする力が弱まり、太腿の奥部が露になる。清楚なそこは充血しきってひし形に口を開き、二度の射精や破瓜の血がほとんど見られないほどに滾々と蜜汁を垂れ流していた。男たちの野獣めいた視線が集中すると、内側の襞肉がざわざわと誘うように蠢く。

「へへへっ。入れてもいねぇのに盛り上がりやがって、この淫売女が！」

切羽詰まって顔をタコのように真っ赤にしながら、海坊主が腰をせり出して言った。

そうして汚い言葉を投げかけられると、またしてもゾクゾクと高揚感が身を包む。

沢山の男たちに囲まれて陵辱される。そのことが、凛々しい戦士の中に眠っていた被虐症という性癖に火をつけたのだった。侮蔑的な言葉で罵りを受けるたび、滾る性欲を押しつけられるたび、恍惚となるほど甘い感情が胸を満たす。まして子宮が刺激を求め欲求不満になっているいまでは、精神の昂ぶりはそのまま猛烈な疼きへと変化した。

「なにうっとりしてやがる！　オラ、顔に種汁ぶっかけて欲しいですって言ってみろ！」

なおも男が荒々しく怒鳴り立てる。
（や、やだやだ……。わ、わたし……、わたし……）
どんなにこらえようとしても、一旦目覚めた被虐という名の淫性は、少女の理性を容易く裏切った。
「ほ、ほしい……。です……。顔に……っ、顔に子種をかけてくださぁいっ！」
半開きになった唇から、最初搾り出すように、あとにいくにつれて叫ぶような口調で、自分自身でも本心なのか違うのか分からない言葉が出てしまう。
「ふく……っ。よ、よぉしっ。出るぞっ。オラッ！　たっぷり出してやる！」
紅葉あわせの快楽に加え、少女を征服した手応えを感じたのだろう。大声でうめきながら海坊主が達した。
「……ぁ……っ、く、くる……っ！」
胸の谷間に感じる律動に合わせ、少女の種汁まみれになった身体がわずかに仰け反った。とろんと悩ましいほど潤んだ瞳を向けたまま、巫女の喉がコクリと動く。まるで、その瞬間を待ちわびるように。
――じゅぷるるるっ！　じゅぴゅるっ！　びゅぴゅっ！
「～～～～～～……ふぁぁあっっ……～～っっ！」
硬いほどに濃厚で、むせるほど生臭い体液が、鼻先で潰れて顔中にぶちまけられていく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/